
Fate/another Zero

水無瀬 瞳月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fate / another zero

【Zコード】

Z5942Z

【作者名】

水無瀬 瞳月

【あらすじ】

あらゆる“奇跡”を叶える「聖杯」の力を巡って、七人の魔術師マスターが霸を競い合う究極の決闘劇……聖杯戦争。その戦いのはてに命を落とした間桐雁夜は言峰の長女として再び生を受けた。とりあえず時臣を殴つてやろうと画策するが、雁夜だったころとは余りに違います……

一部(?)キャラ崩壊します

基本のノリは軽いですが、時々シリアルになります

歳の差が公式と違つるのは仕様です

一步、また一步と着実に、雁夜は教会へと歩を進めていく。だがそれの倍以上の速さで、体内の刻印虫が彼の生命を蝕む。耳を澄ませば、血肉を啜り、骨を削り喰らう蟲の鳴き声が聞こえてくる。じくじくと身を苛み続ける刻印虫の痛みは、すでに雁夜にとつて呼吸や心臓の鼓動と同じく肉体の一部となっていたため、それに雁夜が意識をとられることがないが、血の氣をなくした肌の下で蟲がうごめくのに合わせ、引き攣る皮膚は雁夜以外の人間がいれば目を逸らしちくなるほどに醜悪だ。意識は常に朦朧とし、氣を抜くと時間の経過すらあやふやになる状態で、それでも雁夜は一步、また一步と足を運ぶ。

全ては決して許すまいと自らに誓つた願いのためである。

あと何回、戦えるのか。

あと何日、生きていられるか。

そんなことは自分自身にもわからない。この手に聖杯を掴み、桜を間桐から救いだし、あの人に笑顔を取り戻せるなど、それこそ奇跡に期待するしかないのではないか。ならば己は祈るべきなのだろうか。

(「冗談じゃ……ない……ッ！」)

そんなふうに弱気になるたびに、雁夜は自らを呪うように叱咤する。なにも自分はありもしない救いをもとめて、ここに来たわけではない。葵を奪つた時臣を、桜を棄てた時臣を、この手で叩き伏せるために雁夜は祭壇の前に立つ。胸に燃え盛る憎惡の炎は、肉体の痛みも、葛藤も絶望もすべて灰にした。今の雁夜は敗北の恐怖も忘れ、憎い相手の心臓をえぐり取り、その返り血を満身に浴びることだけに焦がれていた。

軋む扉を渾身の力で押し開け、なんとか身体をいれるとそこには思つてもいなかつた光景が広がつていた。礼拝堂の中を柔らかく照らし出す燭台の灯とは裏腹に、凄惨としか言いようがなかつた。全身の血という血を、内臓という内臓をぶちまけ変わり果てた遠坂時臣がそこにあつた。無事に残つているのは頭部だけでそのほかはものはや、人としての姿を保つておらず、ただの肉片となり辺りに散つている。

「

混乱と衝撃は、実際にハンマーで頭を一撃されたのと同等の破壊力でもつて間桐雁夜に襲い掛かつた。抜け殻のように虚ろな死相は紛れもなく本物であり、その容貌は疑いの余地なく遠坂時臣のそれだつた。その時点で雁夜には、時臣の死を事実として受け入れるしか他になかつた。

「 な 何 何故……？」

足元に散らばる時臣だったものに気をかけることもなく、近づきそして唯一残つていた時臣を抱き上げ、見つめる。見下しきつた高慢な冷笑も、慄懾で冷酷な口調と嘲りの言葉も、そこにはなくただ“無”があつた。

そして

「……雁夜、くん？」

その後のことはあまりよく覚えていない。いや、思い出したくな
いだけなのかもしれない。ただ一つわかつたのは雁夜は、一つ間違
つていた。

「バーサーカー…」

自分はやり方を間違ったのだ。桜は決して監禁されていたのでは
なかつたのだから、昼間のうちに遠坂に無理にでも連れていけば、
有能な魔術師である時臣のことだ…娘が蟲の苗床にされていること
はわかつただろう。

「……残り全ての令呪をもつて命じる」

結局一人よがりな英雄願望に踊つていただけなのだ。その結果が
これだ。

「俺を殺せ…」

その日たつた一人のためにヒーローで在ろうとした男の人生に幕
がひかれた。

神秘学の語るとこによれば、この世界の外側には次元論の頂点にある『力』があるという。ありとあらゆる出来事の発端であり終焉、この世の全てを記録し、この世の全てを創造できる神の座。それを魔術師は『根源の渦』といいそれに到ることを悲願としている。しかし実際はそんなものではないと、世界をのぞき見ていた神はせせら笑う。世界の外とはまた別の理を持つた世界があることであり、出来事の発端も終焉も、全ては数多い神の気まぐれ一つ。そんな事実も知らず、世界の外へ到ろうとする愚かな魔術師達が、その神はどうしようもなく愛おしかった。

「想いに焦がれ死ぬ…か、いやはや人間とはどうしていつも愚かで愛しいのかな。やはりこの手で一度造つてみたい…」

神に名を連ねるソレは呟く。しかし、それは容易ではない。始まりの闇たる神が、初めて造りあげた出来損ないの欠陥品だが存外、人というものは複雑である。

「器くらいは造作もないが魂となると些か荷が重いな」

だが、不可能ではない。ソレが覗いていた世界はもつとも神に近い。そこでなら干渉もしく、尚且つアレがいる。

「ちょうど壊れた器もることだしな」

世界を一瞥。映るは、壊れた一人の男。

「どうせなら完全に道を壊すのもまた一興か」

どうせアレのおかげですでに道は歪んでいる。神自ら歪みを加えることは、不敬なことであるが、すでに歪んだものを壊することは咎められるものではない。

「ああ、楽しめよ間桐雁夜」

同日、カラカラと音をたて、廻っていた歯車がその動きを止め、新たに風がふきはじめた。

始まりは三人の魔術師だつた。アインツベルン、マキリ、遠坂、彼らが企てたのはありとあらゆる願望を実現させるという聖杯の召喚。三家の魔術師は互いの秘術を提供しあい、ついに『万能の釜』たる聖杯を現出させることに成功した。……だが、その聖杯が叶えるのはただ一人の祈りのみ。それから協力関係は血を血で洗う闘争へと形を変えた。これが『聖杯戦争』の始まりである。以来、60年に一度の周期で、聖杯はかつて召喚された極東の地『冬木』に再来する。そして聖杯はそれを手にする権限を持つ者として、7人の魔術師を選抜、その膨大な魔力をもつとして『サーヴァント』と呼ばれる英靈召喚を可能とし、誰が担い手として相応しいか死闘でもつて見極める。

「告げる」

男は紡ぐ。この世でただ一人、悲しませたくなかつた女性を想い

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に」

間桐の魔術『刻印虫』を擬似的な魔術回路とし、その身を糧に魔力を練り上げる

「聖杯の寄るべに従ひこの意、この理に従うなりば應えよ」

蟲に犯され頭髪が残らず、白髪にならつとも

「誓いを此処に」

左半身が麻痺し、一度と機能が戻らなくとも

「我是常世總ての善と成る者」

寿命がもつてあと三週間程度だとしても

「我は常世總ての惡を敷ぐ者 されど汝はその眼を混沌に纏らせ侍るべしつ…くつ」

振り返らず、立ち止まらなかつた。刻印虫を刺激し活性化させる負担は、四肢を痙攣させ、端々の毛細血管を破り血を滲ませる。それでも、彼は精神の集中を緩めない。

(桜ちゃんのために、何より葵さんのためにも俺は、ひけないんだ！…)

願いは己ではなく自身の、最も大切な女性のために。^{ひと}

Act 1 There is telling what will happen

雪が深々と降る。空を舞う六花は辺りを覆い、昼とは一転し白銀の世界を作りだしていた。12月25日..キリストが生まれたとされる日に、イタリアの病院で一つの命が生まれた。大きな産声を上げ、元気に生まれてきた女の子は『言峰綺璃』と名付けられた。

「ふふつ、そんなとこに立つてビーツしたの? 綺礼」

産後の経過もよく、生まれたばかりの娘を抱きながらあやしていると病室の入口に長男、綺礼が立っていた。いらっしゃいと、手招きすればベットまで寄りしげしげと、腕に抱かれている妹を覗き込む。

「…赤ちゃんってこんなに小さなんだ」

感心したように言ひ、常ならぬ息子の様子に微笑み母は冗談交じりの言葉をかえす。

「あら、この子はおつきにほうなのよ。あなたなんてもつと小さかつたんだから、もしかしたら妹のほうがおつきくなったりしてね」

「それは…いやだ」

それに今年14となる兄、言峰綺礼はムスッとし眉間にしわをよせるが、赤ん坊のことは今だ興味深そうに見ついている。しかし、その小さな手に触れようと手を伸ばしたが、途中で引つ込めてしまった。揺れる瞳に妹を[写]し、その視線には愛おしさが宿っているが、触れることはしない。そんな綺礼を見て母は苦笑を一つ零し、大丈夫よと笑う。

「代行者であることを気にしたの？」

「…はい」

10代から異端討伐の殺人部隊に所属している綺礼は、生まれたばかりの妹に己の、朱に浸かった手で触れていいのかと躊躇したのだ。

「そう…よかつた」

「はあ？」

「だつてあなた、ちつても子供らしくないんですもの」

小さいころから凡そ目的意識もなく、心を動かすこともなかつた。代行者に任命され、殺人を仕事としなくてはいけなくなつたときも、返事一つで承諾した綺礼。そんなどこか空虚な人間だつた息子が、躊躇した。そのことが嬉しいのだと母は破顔する。

「それにね綺礼。この子は特別なのよ、何てつたつて神様の類い稀な加護を受けているんですね」「神様の？」

「ええ、神様の。あ、でも父さんには秘密よあの人…それを知つたら絶対に報告しちゃうもの」

だから触れても大丈夫よ。あなたが気にしてても神様パワーでそんなのものともしないんだからと、悪戯つ子のように笑う母につられて綺礼も笑つた。

「だからこの子を譲つてあげて」

才能というプレゼントをもらつて、神からの加護を受けていると
いつても、今だ幼く自分を守ることが出来ないこの子をよろしくね

と母は笑つた。

「はい。」

それにしつかりと返事をし、今だ揺れる瞳で綺璃を見つめ、触れるべきか悩んでいる綺礼の服をキュッと、握った小さな存在に戸惑いながら確かに綺礼は、その日初めて心を動かした。何が確かに変わり始めていた。

言峰綺璃。それが今世での名前だった。かつて敵として相対した男の妹になるなんて、どんな運命だと元、間桐雁夜は嘆息する。

(はあ、しかもイタリアなんて)

まったくもつてついていない。日本の大木にいたならば、あの時臣と葵さんが接触する機会を潰してやるのに。

(ニヤ、まじよ…)

むかつくなことに時臣と雁夜は、幼なじみというやつだった。そして自分は幼児、ということはあの憎たらしい時臣も幼児。

(だったら今は魔術とか、武術をひとん鍛えるか)

かつての自分はそれで失敗した。一年たつて魔術師にならうとして、知識もなかつたため臓硯に躍らされ、あげくの果ては終盤に自分が間違つていたことに気付き自殺ときた。今思いかえしても、顔から火ができるくらい恥ずかしいし、泣きたいほどに情けない。

(だけどこれで今度こそ葵さんを笑顔にできる)

もう一度と同じ間違いは犯さない。この身体では彼女と結ばれることはないが、それでもかまわなかつた。彼女が笑顔でいられる未来が作れるのであれば。

(まつてろみ時臣ーー)

就寝前のベットで固く誓うが、綺璃は一つ忘れていた。一つは今自分は、雁夜だったころ10は下であるう綺礼の、さらに14下の妹であるということ。そして、妹を護るという目的をもち、超絶システムへと進化を遂げた兄と、田に入れても痛くないほどに親バカ全開で、猫可愛がる父がそう易々と魔術や武術を習わしてくれることはないということを…道は果てしなく遠そうである。

朝一でおねだりしてみたが光速で却下された。

曰く、魔術師と教会は相容れないのだから諦めなさい。

曰く、かわいい顔や大事な身体に傷がついたらどうするんだ。

曰く、兄さんが護つてやるから心配するな。

曰く、そもそも俺より弱い奴に教えをこう必要はない。以下エンドレス。

(まともな意見が一番最初しかないってどうこいつだよ)

せめて母がいてくれればよかつたのだが、あいにく母は今フランスに友人達と旅行中である。

「あー、兄貴」

「…はあ、何度も言つが綺璃、お前は女の子なんだ。それらしい言葉遣いをしなさい…いや、までよただでさえかわいいのに、言葉遣いを治してしまつたら余計な虫が…いやでも」

さうには脱線し、話が全く進まない。これが外に出ると過保護なお兄様で済んでしまうのが怖いところである。つづづく、自身のまさに病弱で物静かなお嬢様といった姿が恨めしい。

先祖帰りだか何だかで、日本人離れした顔立ちに、白銀の髪に空を寫したような瞳。兄も最近ではよく笑うようになり、二人揃つていれば眼福間違いなしである、ただし今だに男言葉が、抜けない綺璃が口を開かなければという注釈がつくが。

「とにかく、魔術も武術も諦めなさい」

「はあーい…」

少々、行き過ぎではあるが父も兄も自分を心配しての言動なのだと納得し、いざという時は兄に時臣をとつちめて貰おうと、些か黒いことを綺璃が考えていると轟音を響かせて玄関が蹴破られた。慌

ただしくビギングから玄関に向かう兄と、父についていくとやつては旅行中であるはずの母が悠然と立っていた。

「あなた、それに綺礼？私いいましたよね綺璃が、自分から魔術を習いたいといつたら許可してあげて下さいと」

その美しい顔は確かに笑っているのだが…それは見るものを恐怖のどん底に突き落とすものでしかなかった。それ以前になぜ、いなかつた時の会話まで把握しているのだろう。そんな母に父はともかく、あの兄まで顔から血の気が引いている。思わず綺璃は止めようとした母の袖を引っ張るがやんわりと制され、それ以上なにも出来なくなってしまう。しかし次の言葉で綺璃も血の氣をなくした。

「それに、もう遠坂には許可をもらっていますの。と、いうわけで魔術を習いに行くわよ綺礼、綺璃」

「はー？」

確かに魔術を習いたいと言つた。だがなんでよりによつて遠坂なのだ。しかし、遠坂を雁夜でなく綺璃が知つているはずもなく、結果反対も出来ずに入れよあれよあれよというままに飛行機に乗せられ、兄と妹は、母と灰になつた父に手を振り日本に旅立つたのである。

「あに…兄様、遠坂つて何ですか」

出発ぎりぎりまで母によつて、行われた教育といつもの拷問のかげか、女言葉、それも淑女（レディー）のよつなそれは思つたよりも、嫌悪も違和感もなくスルリと口から出てきた。そのことにダ

メージを受けながらも、今は情報収集が第一だと綺礼に尋ねる。

「ああ、宝石魔術を得意とする一族だ。特に次期当主と名高い遠坂時臣は才はそれ程でもないが、努力と修練でもって一流の魔術師まで上り詰めた人物だ」

（あの、時臣が？）

にわかには信じられなかつた。だが、やはり自分が綺礼の妹として存在している世界だ。雁夜だつた世界との差異はあるだろう。少なくとも間桐雁夜の知る、遠坂時臣は才に溢れ誰よりも魔術師らしい奴だつた。

（「」の時臣は違うのかもな…）

「気にくわない時臣。だが、」ことかつて雁夜の幼なじみであつた時臣とは同一ではないのだと認識し直す。だからといって時臣に対する苦手意識も、憎悪もなくなつたわけではないので自分から近付くことはないだろう。

「そろそろ武術は俺が、気にくわないが魔術に関しては、2人ともその遠坂時臣に指示することになるそうだ」

「ふえ？」

「何だ、意外だつたか…俺が魔術を学ぶことにしたのは綺璃を護る手段を増やすためだ。いうならば、魔術師ではなく魔術使いといつたところだ」

「いえ、それはありがたいのですが…」

「?、ならば行くぞ先方がすでに迎えに来ている」

2人分のカートを片手で押す、兄に手を引かれ到着ロビーに向かう間、綺璃の頭は真っ白だつた。いくら雁夜であつたころよりも数

倍、才に溢れているといつても“あの”時臣に師事することになるなんて…いくら同一でないといつても大変遠慮したい。が、対立関係にある教会と魔術協会の現実を考えれば、簡単に変更等できないだろう。しかも相手は御三家の一つ遠坂である。喜ばれることはあっても、拒否される理由がない。

(詰んだ…完璧に…)

せめてもの救いは兄も一緒にあることだが、兄は超絶パソコンであるが認めている相手に対しても、著しくそのガードが低くなるのである。今回は母の紹介である上に、遠坂時臣の人柄はともかく実力とそこに到るまでの努力は認めている。つまり兄を使って時臣に危害を加えることは不可能。

さらにもうならば出発間近にやつと、時臣との年齢差をしつかりと理解した。時臣は綺麗の8つ上、現在13歳である。年少の身ですでに次期遠坂家当主と名高い彼に、自分ができることは現時点では皆無。いくら才に溢れていようが、後数年内に彼に追いつき、追い抜くのもまた絶望的。

そして追い撃ちをかけるように、到着ロビーで待つ人の中に雁夜の記憶にない男に肩を抱かれ、赤ん坊をその手に抱き、ベビーカーを押す“遠坂葵”の姿を目にし綺麗の目の前は真っ暗になった。

ショックだった。時臣が兄より六つも下だといふことも、葵が雁夜だったころにはいもしなかつた、得体のしれない男と結婚していることが。

(…遠坂邸か)

田を覚ますと知らない部屋だった。気を失っている間に運ばれたらしい。見覚えはないが、荘厳な室内の雰囲気からあたりをつける。

(誰なんだうつな…アレ)

遠坂の分家筋のものだらうか。だとしたら幸なのかもしれない、魔術は基本一子相伝。時臣が変わらず次期当主といふことは、あの男は魔術と何の関わりもない可能性が高い。

(とんだ皮肉だな)

理由がなくなってしまった。雁夜だったころの願いを、叶えたいがために魔術を身につけることを望んだのに、すでに彼女は幸せそうだ。つぐづぐ口といふものはタイミングを逃してばかりいる。

(なのに時臣に魔術を習わなくちゃいけないなんて…)

がつくつと肩を落とし頭をたれる。今更、断れるわけもない。しかも師事するのは時臣だ。一重の意味で苦痛である。それに引きず

られ、雁夜だつゝの時臣につけた諸々の所業も思い出されたらしく、ベットの上でさうに綺璃はうなだれる。そんな綺璃の意識を現実に引き戻したのは一つのノックだった。そうして入ってきた男に綺璃は目を丸くした。

「遠坂…時臣？」

「なんだ知つてたのか。だが初対面の年上を呼び捨てにするとはいただけないね」

相変わらずな時臣にやつぱり嫌いだと再認識し、すぐにベットを下り礼をとりながら、笑顔を張り付け迎え撃つ。

「失礼しました。吉峰璃正が長女、綺璃です。」

「知つているようだが遠坂時臣だ。智由紀さんには従兄弟が随分と世話をかけたね」

「母ですか？」

初耳だ、そして従兄弟とはあの得体のしれない男のことだらうか？

「ああ、詳しく述べ陸さんから聞くといい。そっちの方面では君の母君は有名だからね」

「は、はあ…」

有名つて何したんだ母さん…とシシ「ミ!」といし、氣になる綺璃だつたが、おそらくその陸さんとやらに聞く勇気はでないだろ。笑顔一つで代行者である兄を、押さえ込める母の秘密なんて、數を突いて蛇なんてかわいいもんのじゃないと本能が警鐘を鳴らしているためである。

そんな綺璃について来なさいと一言告げ、絨毯が敷き詰められた廊下を歩きながら屋敷内の案内を始めた時臣は、おもむろに口を開

いた。

「聞いていると思うけど君達に僕が魔術を教える。正直、君は僕なんかよりも魔術の才に溢れている。だからこそ智由紀さんも無理を通したのだろう」

魔術師の世界では利害のぶつかったのならば、たとえそれが血縁であろうが師弟関係にあるうが、殺しあいに発展することは珍しくもない日常だ。

そしてどこまでも魔道をつきつめ、時に倫理や道徳すら捨て去るのが魔術師である。そんな魔術側と対立する教会側に、魔術の才の塊といつても過言でもない存在がなんの知識も持たず、教育も受けない状態でいればそれは、言葉は悪いがいい“力モ”だ。

「ここまで言えばわかるね？君はなんらかの目的があつて、魔術の道に入ったのかもしない。だけど目的以前にまずは、自分の身を守れるようになりなさい」

「はい…」

「よし。それじゃあ修業の間はこの部屋を使つてくれ。今日のところは何もしないから休んでくれていいい、それじゃあ

「ありがとうございました」

わざわざ覚悟を決めさせるような言い方をしたのは、彼なりの優しさなのかもしれない。そういえば自分がまだ、魔術から逃げ出していくなかつたころは今のように、気を使ってくれたこともあったかもと、綺璃は思い起します。

時臣との間に溝ができたのは、高校に入り本格的に魔術から逃げるようになったころだった気がする。それまでは、特に仲良くもなかつたが普通の幼なじみだった。きっと誰よりも魔術師たらんとした時臣に、魔術から逃げる雁夜の姿は何よりも忌むものとして写っ

たのだね。

「だからっていっても嫌いだけどな

推測通りだとしても、そもそも生粹の魔術師たるつとする時臣の思考が、綺璃は理解出来ないので結局、この先も嫌いなままだろう。見下されてないだけマシかもしれないが、才に見合つだけの魔術師らしさを身につける、等と言われたらキレる自信がある。

「修業は明日からか…はあ、憂鬱だ」

深いため息をつき、荷物を整理すべく綺璃は部屋の隅にあつたカバンを引き寄せ、チャックを開け、そして固まった。

「え、嘘つ！…なんでさ！？」

溢れだしたのは、ピンクにオレンジ、セルリアンにピスタチオグリーン。さらには纖細なレースの雨嵐に、可愛らしいランジェリー。自分で詰めたはずの、ボーアッシュで機能性を優先した服は影もなかつた。極めつけは同封された手紙で、

「素敵なレディーになつて帰つてきてください。遠坂の家訓は“常に優雅たれ”なので丁度良いでしょう　P.S. ここの修業は遠坂の奥様にお願いしていますので、逃げたりしないように 母より…絶望だ」

またあの地獄が始まるのかと綺璃は涙する。

柔らかそうだが癖のない肩にどぞく白金の髪は風に揺れ、海を掬いとつたかのような瞳は陽光に反射する。西洋人形を思わせる整った容姿と、外国の血が入っているための色合には彼女に良く似合つていて“綺麗だ”そう素直に思つた。

「これはまた…凄いのがきちゃつたね～」
「確かに魔術の才は桁違いだときいていますが…」

向こうから歩いてくる兄妹をみながら従兄弟が言う。どこか感心する従兄弟を見上げるが、彼が言いたいのはそういうことではなかつたらしく、首を横に振られ、何時ものどこか緩い口調が一変する。

「流石は智由紀の娘、か…凄いのがお守りについてる。正直、今からでも“こっち”に引きずりこみたい」

彼女　　言峰綺璃の背後を鋭い目でみながら口元だけで笑いながら男、篠崎陸は言う。が、そう易々と貴重な人材を墮とされては敵わないでの、釘を刺そうとすると目前まで迫つた少女の身体が力を失い倒れた。幸い、兄が抱き留めたので打ち付けられることは、避けられたが完全に気を失つてしまつているようだ。

「智由紀と違つて、身体は丈夫じゃないのかな～」
「…そうかもしないですね」

突然切り替わる相変わらずな従兄弟に、脱力しながらも早く屋敷に運んだほうが、良いだろ?と思ひ、射殺さんばかりにじからを睨みつける兄に深く一礼。

「遠坂家次期当主、遠坂時臣です。言峰綺礼さんと綺璃さんで間違いありませんね…迎えにあがりました」

荷物の整理を終えた綺璃は、兄の元へ向かおうとした。時臣による魔術の修業は明日からだが、兄による武術の修業について話を聞くためである。シスコンな兄が、倒れた綺璃を修業させるわけはないが、それでも一応と思い部屋を出ようとしたが、そこで気づいた。自分が今いるのは魔術師の家だということに。

(まずったな…)

先程の案内のなかで、入つてはいけない部屋は最低限説明をうけたが、屋敷ないに仕掛けられた諸々の罠も、命に関わる物は教えられただが、それ以外のものは教わっていない。間桐ばりの陰湿で家の者もウツカリ死ぬものが、ホイホイとあるはずがないが、無傷で兄の元までたどり着くのは無理だろ。それを強行すれば、時臣を最底层レベルではあるが認めている兄は、間違いなくその矛先をこちらに向け昏々と説教するに違いない。

(とりあえず、誰か来るまで大人しくしてゐるか)

家のものは来なくても、綺礼は間違いなく来るだろう。そつまとめ、暇つぶしに本でも読むかと備え付けの、本棚から本を抜き取つたのが運のつきだった。ガチリと何かが外れる音がし、急いで離れる綺璃だったが時既に遅く。マンホールよろしくぽつかりと空いた足元の穴に、悲鳴を上げる間もなく落ちていった。

「で、ジーニー寧に俺だけ呼びだして何のよつだ：生臭さ坊主」
殺氣立つ綺礼を前にしてもへラリとしているのは『篠崎陸』。綺礼
は坊主といったが、正確にはそうではない。

「だから～俺は、坊主じゃなくて～チョー有能&・万能な
祓い師”なんだつてば～」

「そんな名称がない以上、寺の住職のお前は生臭さ坊主で十分だ」

悪魔に悪靈、なんでも御座れ、あなたの悩みも祓います。とは当
人の弁だが、全くもつて信用も信頼もない自然、綺礼の言葉も
きつくなる。それを気にした様子もなく、へラリとまるで今日の夕
飯の話をするような気軽さで、陸は特大の爆弾を放り込んだ。

「妹ちゃん～」この才能は並だけど、チョー強い保護者が憑いてる
んだよね～…寄越す気ない？」

最後の言葉だけ、目を鋭くし綺礼見遣るが即答で断られてしまう。
それに残念だと、軽く言つと乗り出していた身を引き、コーヒーを
一口。どうやら話は終わりのようだ、しかし部屋を出でていこうと立
つた綺礼に陸が、最後に投げかけた言葉に再び綺礼は、腰を下ろす
ことになる。

「あ、でも…妹ちゃん今“壺”の中にはいるんだよね～」

どりとした闇だ。この世の怨嗟と怨恨と嫌悪だけを煮詰めたような暗闇に知らず、身震いをする。高さにして10mほどだろうか、高さがあつたにも関わらず綺麗は無傷だつた。しかしそのことを疑問に思う間もなく、答は既にあつた。

床が見えない程に積み重なり、打ち捨てられた腐臭を放つ骸が下にあつた。爬虫類に始まり猫に犬、中には間桐の蟲のようなものまである。それらは切り刻まれ、ぶちまけられた臓腑と血は既に乾きはじめている。嫌悪に顔を歪めてもまだ、冷静でいられた。かつて間桐雁夜であつたころ、用済みだと母が蟲に喰られていく様を、蟲に犯され心を壊され身体を病んでいく少女の様を見ていた綺麗は、この程度で動搖することはなかつた。

所詮、ここにあるのは自分に全く関係のない物言わぬ骸。そう思ひ、骸の山から埋まつていた足を引き抜いたときそれは見えた。鎧だ。古めかしいそれは西洋の物でフルプレートのそれには腹部に特大の穴が空いており、そこからちぎれた腸が垂れ下がつていた。

「 つ……！」

一瞬思考が止まる。自分には無関係だと割り切り冷静でいられたのは、自分と同種がそこにいなかつたからに他ならない。だが、天秤は傾いた。今まで気にもしていなかつたもの全てに、吐き気を覚えて、堪えきれず嘔吐する。タイツに染み込んだ血が、辺りを覆う腐

臭が、散乱する臓腑が、その全てに人のものも混じっている。そう自覚したときどうしようもない恐怖を覚えた。だが悲鳴は喉に張り付き、声にならない。

(どうして、なんで、何のために…)

思考もループし纏まらない。たが綺璃は気付かない、パニックに陥り完全に冷静を失っている。パニックは人間の生存本能であり、生き残るための手段だ。死に物狂いで、脇目も振らずその場か逃げるために、パニックを起こす。だが、この場においてそれは最悪の一 手だった。後ろで何かが動く。重たい何かを引きずるような音をたて、綺璃に一步また一步と近づくが、綺璃はそれに気づけない。そして、背後に立たれ影が伸びたことでやつと気づくが時既に遅く、綺璃はその息を止めた。

投擲されたナイフが、コーヒーを置いた陸の手ギリギリに刺さる。それを眉一つ動かさず抜き、全く同じ軌跡で綺礼の元に帰す。が、綺礼も慣れたもので何事もなかつたかのようにナイフを受け取り、懷にしまつ。

「いつになく余裕がないね～お兄ちゃんは～」
「お前のような妖怪を相手するのに余裕があるわけがない」
「ちょっとこんな若々しい僕をして～さつきから失礼じゃな

「……？」

不敵な笑みを浮かべ、余裕のある陸とは対照的に綺礼は油断なくナイフを構え、すでに戦闘体勢になつてゐる。そんな綺礼にニヤリと陸は、口をそりと歪める。

「やる気満々のとこ悪いんだけど、今回のことは遠坂のせいだよ。誓つて僕は今田は何もしていない」

「……遠坂だと？」

訝し気な綺礼にさりに陸は、言葉を重ねる。

「遠坂家天下の宝刀、うつかりだよ」

「…………うつかりだとしても元を正せばお前のせいだろ？ 篠崎陸」しかし、綺礼は構えを解かない。

「まあ、原因とかはビデオでもいいよ。それより早く妹ちゃんのといいかなくていいの～？」

死んじやうよ。やつ言葉を続ければ面白こいつに膨らむ殺氣と、さらに口は歪む。

「入口は開けたまんまだから行つてらっしゃ～」

「戻つてきたら話してもらひ……」

「気がむいたらね～」

部屋を出て行つてた綺礼の背中が見えなくなるまで手を振ると、一口ヒーをまた一口飲み、陸も消えた。

• (前書き)

F a t e の人気つぱりに『ビビッてる作者です。
何はともあれ、お気に入り登録『50』到達ありがとうございます。
これからも頑張っていきますので宜しくお願いします。
感想や指摘もありがたいので、気楽にしてください結構です。

暗い緑の闇。深海のようなそれはぬめりをもつて絡み付く。餽えた匂いが鼻につくそこは、間桐の深淵にして魔術。マキリのために多くの命が散った場所。

暗転

母が生きながら餌となるのを見た。最初に四肢を、そして内臓を喰らい口内からはいた蟲を最後に、意識を飛ばす。

暗転

次は少女が蟲に犯されるのを見た。既に心は引き裂かれ、髪も瞳も色を変えた姿に自分の罪を知った。そして誓つ……。

暗転

誓いの始まり。身体を生きながら喰われる恐怖を押さえ付け、痛みに耐え、流れる血も構わずに叫ぶ。

その果てに自分は何を得たのだろう。自殺し綺麗として再び此処に到つたのは何故だ……ああ、解らない。だが、これだけは解る……

(まだつ……死ね、な……い)

葵さんは笑っていた。今度こそ普通の家庭で幸せになれるのだろう。時臣は相変わらず嫌いだ。別のあいつがやつたことは今だに理解できないし、したくもない。それでも少しは歩みよってもいいか

もしけない。 雁夜としてならそこで終わってもいいのかかもしれない。なんの未練もなく、安らかに逝けるだろう。

だが『言峰綺璃』はそれでどうなる。今だに女言葉は慣れないし、スカートも長い髪もうつとおしい。雁夜だったころの相違点でショックを受けることも多々有る。

(それでも……俺は私として……)

暗転ではなく、覚醒

口と鼻を押さえ付けていた手が外され、呼吸が再開される。だが、短くない時間止められていた所以か、意識に霞がかかる。また急に空気が入り込んできたことで、咳も止まらない。せめて、顔をぐらいは見てやろうと振り替えようとするが、首筋に手刀を叩きこまれ意識を完全に刈り取られる。それでも気を失う瞬間、振り返り見えたものは懐かしい顔だった。

『Are you ?
(あなたは ですか?)』

…そうだ

『Do you want to become ?

(あなたは になりたいですか?)』

何度も同じことをこわせるな

『あなたは になるために“何が”できる?』

できるか…なんだって。手段を選ばずなんだってしていただきつ
俺が“産まれてくるために”

「…なんだって」

『あなたは じゃないのに?』

「…だから本物の がいなくなればいいんだ」

『あなたは を殺しましたか?』

「…俺は…」

…じゃあお前がいなくなれば俺が…
よな?

になれるんだ

『あなたは を殺しましたか?』
『あなたは を殺しましたか?』
『あなたは を殺しましたか?』
『あなたは を殺しましたか?』
『あなたは を殺しましたか?』
『あなたは を殺しましたか?』

…俺、は…

『あなたは

を殺しましたか?』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5942z/>

Fate/another Zero

2011年12月21日20時53分発行